

東西と一ざい

電源スイッチの記号

滋賀県・小野 隆浩



最近の音響機器、特に輸入品の電源スイッチに(写真1)のように記号表示しかないものが増えている気がしている。押し込み式のスイッチであれば「電源オン」とか「電源オフ」という「押した感、電源が入った感」があるため問題ないが、シーソー式スイッチ(正式にはロッカースイッチ)だと、とりあえずスイッチを動かしてフロントパネルの表示等で電源の入り切りを確認することが多いことだろう。さてこの電源スイッチの記号表示だが、どちらが電源オンか音響家であれば周知の事だと思う。しかし、たまた

ま学生から聞かれて教室内でアンケートを取ったところ(単に挙手してもらっただけだが)何と驚くべき結果となった。



写真1

(写真2)の表示が「電源オフ」と思っている学生が80%以上で、その理由は「何となく休憩中に見えるから」で、当然ながら(写真3)のほうが「電源オン」と思っている学生がほとんどという真逆の結果になった。理由は「だって○はOKという意味でしょ!」ということらしい。彼ら彼女らの表示記号から受けた印象も、確かに一理あるような気もする



写真2

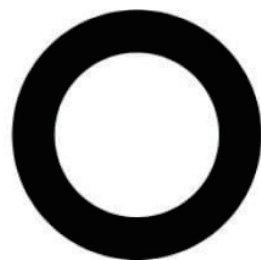


写真3

が、舞台音響を学ぶ学生がこの調子では、世間一般の数多くの人も同様の認識か、もしくは気にもしていないのであろう。

ご存じの方も多いと思うが、この記号はメーカーが勝手につけたものではなくIEC国際電気標準会議(International Electrotechnical Commission)で決まっている世界標準の規格である。家庭や職場でも国産の家電製品が多かった我が国では、この記号自体あまり馴染みがなかっただけで、世界中の人々は問題なく使っていたようである。実は私も数年前に買い求めたドイツデザインのスチームクリーナーの電源スイッチがこれで、その他の表示もなくスチームが出

るまで動作音もしない製品であるため、どちらが「電源オン」なのか分からず、日本語の説明書を熟読した覚えがあるので偉そうなことは言えない。その際に勝手にIマークは「イン」○マークは「アウト」と自分の中で無理やりこじつけて納得したが、本来は二進法の1と0の意味合いらしい。(諸説あります)



写真4

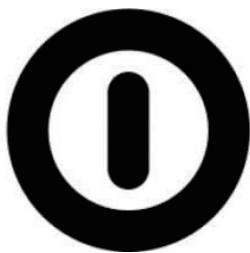


写真5

今回学生に教えるためIECのマークを確認していて、また新しい発見があった。コンピューター等でよく見かける(写真4)のマークは「電源スイッチ」の表示だと思っていたが、実は「電源スタンバイ」を表す記号だった。本来の電源スイッチは(写真5)の記号を使うらしいが、今までお目

にかかったことはない。世の中、まだまだ知らないことだらけである。

(大阪芸術大学
びわ湖ホール)

捨てる話

岐阜県・熊野 大輔



もともと捨てるのが下手で、引っ越しのたびに大量に物を捨て、また溜めて、次の引っ越しで大量に捨てて、ということを繰り返しています。貧乏性で、物がないと落ち着かないということなのかも知れません。クローゼットの中には2年以上着ていない服があり、10年近く触っていないケーブル類があり、といった具合です。

そんな中でもとくに捨てにくいものが「台本」です。書いたのが身近な人だと捨てるにしのびないという事もあります。私の参加によって台本の中身が変更になったことがあると、なおのことです。「この作品が無ければ、今の自分

はなかった」と言えるような、自分のラディカルな部分に影響を与えた台本もあります。

竹内統一郎さんの『ブンブン鳥合戦始末記』では、届いたばかりの台本の冒頭に歌詞が書かれており、出演者の山崎パニラさんと二人で、「竹内さんが来る前に曲を完成させよう」と大急ぎで作曲・練習して竹内さんの前で披露したところ、「……歌のつもりじゃなかったんだけどなあ」と、それでもボツにならずに、芝居のラストで使われることになりました。良い例なのか分かりませんが、間違いなく私と山崎さんの存在によって台本が書き換えられました。

しゅう史奈さんの『夜のキリン』では、たびたび「あの音」というト書きに遭遇しました。「作品のキモになる音をお任せします」というオーダーに、きちんと応えられたのでしょうか。

松尾スズキさんの『ふくすけ』では、それまでの音響オペレーターのやり方では(少なくとも一人では)できないことを思い知り、これまで自分の両手だけでやってきたことのいくつかを自動でできるようにオペレート環境を作り直しました。これがなければ、

そのあとに続く松尾作品『生きちゃってどうすんだ』『不倫探偵』はもとより、文学座『信じる機械』、劇団昴『BLUE』も成立しなかったかも知れません。そういえば松尾さんが何かのエッセイで「台本を捨てる部屋がすっきりしますよ」という趣旨のことを書いておられました。

故 井上ひさしさんの『天保十二年のシェイクスピア』（松本祐子演出版）では、10日間ほどで15曲強を作曲、稽古用のピアノ伴奏は即興で2時間ほどで録音と、出来る人にはどうってことないのかも知れませんが、私的には最もハードな現場でした。このバージョンは何度が再演の機会があり、2011年2月——東日本大震災の1か月前、ピッコロ劇団での上演の際はバンマスとしても参加しました。弾きながらキューを出しつつシンセの音色を変える余裕が私にはなく、鍋木知宏さんにマニピュレートをお願いしました。私以外の3人のプレイヤーはいずれもCDリリースしている面々で、今思い出してもよく付き合ってくれたなあと冷や汗をかきます。パークッションで参加してくれたはたけやま裕さんは当時すで

に巨匠の風格があり、メール1本でよく引き受けてくださったものです。どの台本にも思い入れが強すぎて、どうにも手放せません。

しかし冷静になってみると大部分は「いつか(再演で)使うかもしれないし」「これは貴重なものだし」「思い出があるし」と、世の「捨てられないひと」の言い分にはほぼ合致しています。今年6月の引っ越しの際、書籍や台本を大量に処分しました。これまでたびたび引っ越してきた中でもたいてい書庫に相当する部屋があったのですが(猫部屋と兼用)、今回の引っ越しでは家族全員個室を確保する代わりに、書籍を各自の部屋に置くことになり、入りきらないものを処分せざるを得なくなったのです。高橋悠治著『ことばをもって音をたちきれ』など、20歳の私に多大な影響を与えたものも処分しました。「台本を捨てるなんて」とお怒りの方もいらっしゃることでしょう。申し訳ない気持ちで一杯ですが、自室を快適にするために犠牲になっていただきました。

ところで先日、とある台本が必要になりました。現在は

出版されていない翻訳劇で入手困難なものなのですが、捨てていました。また職場の来年度の事業で、アートカフェのコーディネーター役を1回だけすることになったのですが、もう専門的な話をする機会はないだろうと音楽史の書籍も捨てていました。しまったなあと思いましたが、仕方ありません。私の人生とはそういう「しまったなあ」の積み重ねで成り立っています。その私にしたところで、有益なところが全くないとは思いませんが、これまで仕事や何やらをやめたことで誰かが困ったという話を聞いたことがありません。

今年も上田の合唱団だ！

東京都・齋藤 美佐男



上信越道の佐久あたり、浅間山を右手に見て上田に向かっていました。昨年10月末、浅間山を左手に見て紅葉の信濃路を東京に向かって進路をとってから、もう1年が経ち

ました。今年もまた信州国際音楽村合唱団VPG定期演奏会のスタッフとして参加するために機材を積んで上信越道を走っています。

自宅のある三鷹からゆっくと休憩を取りながら4時間ほどで練習会場にもなっている上田市文化センターに着きます。2007年から通っている道です。カーナビに頼らず目的地まで着くことが出来る様になってしまいました。

佐久平PAからの眺めは、ここが少し高台にある為佐久の平原が眼前に広がり、いつ見ても気持ちのがびやかになります。このPAでの休憩も毎年の恒例になっています。あと一息で上田菅平のインターチェンジです。いつもは閉店している蕎麦屋が今日は開いていたので初めて佐久平のそばを頂きました。そして売店に立ち寄ります。ここにはピッコロやシナノドルチェ、秋映(あきばえ)等のリングが並んでいます。「朝のリングは医者いらず」という言葉を信じて日常的にリングを食べる習慣が付いている私は、朝に食べるためのリングをここで必ず購入します。今回はシナノスイートをチョイスします。このリングは甘み

と酸味のバランスが良く私の好みのリングです。小ぶりですが一個100円。6個入りで消費税込み600円でした。さすが信州、リングの産地。新鮮でしかも格安です。

去年は創立50周年記念という事でVPGオリジナル音楽劇『曾根崎心中』の公演が有りました。今年も創立50周年記念パートⅡとして合唱の演奏会が開催されます。ボイス・パフォーマンス・グループの頭文字をとってVPGという事です。単純な合唱では飽き足らない集団です。去年の『曾根崎心中』は藤田傳のオリジナル脚色、しかもジャズ界の大御所佐藤允彦さんが作曲の作品ですから、その志向が強く現れています。今回も合唱の演奏会と言っても3部構成で、1部は世界の民謡。2部は合唱でオペラ。3部が未来へつなぐと銘打って日本の音楽の合唱です。

1部の曲目は御^み綬^{しるし}結(台湾)、夕暮れのヤナ(ブルガリア)、スバタバ(ブルガリア)、馬乗り歌(ジョージア)、刈り干し切り唄・おてもやん(日本)等各国の民謡です。この団の顕著な特徴は指揮者なし伴奏なしの合唱です。この1部はま

さに指揮者も伴奏も有りません。全員が息を合わせて歌います。もう一つの特徴として西洋音階だけには頼らない発声です。いわゆる学校で習う様な声楽的発声以外の発声も取り入れているというところです。皆さんはブルガリアン・ボイスというのを聞いたことが有りますか？ これは西洋の音階でも発声でも在りません。ブルガリア民謡独特の発声法で表現されています。この合唱団も始めのうちはこの様な発声にはかなり抵抗が有った様ですが、歌っていく内にこれも又合唱の一つの形態だと気付いたと言っていました。日本の『刈り干し切り唄』は宮崎県の民謡なので、ソロパートは特に民謡の要素が強く含まれています。大友克洋のアニメ『アキラ』の音楽を担当した芸能山城組とコラボした時に影響を受けたとの事です。実は芸能山城組もVPG同様アマチュア集団だそうです。

2部はガラッと変わって「皆でオペラを歌う会」という老人ホームでのリクリエーションが開催される、という設定になっています。合唱団員は、老人ホームの入所者とか施設長やヘルパーさんなど

に扮して寸劇を交えながらオペラのアリアをソロも含めて何故か合唱で歌うという構成です。アリアは普通ソロで歌うものですからね。メリー・ウィドウ・ワルツ、ハバネラ、闘牛士の歌、女心の唄、なぜかフニクリフニクラ(これはオペラでは有りません)、ある晴れた日に(ソロのみ)、乾杯の歌が演奏されました。84歳の団長を含め本当の老人がいる合唱団が、老人の役を演じて見事に歌い上げていました。

3部は日本の歌を合唱で。リフレイン、栄光の架け橋、川の流れのように、歌を歌おう。ポピュラーソングを正当な混声合唱で締めくくりました。

私は音響です。舞台美術と衣装は佐々波雅子さん、照明は宮永綾香さんと中島俊嗣さんが担当しています。がここには舞台監督と演出の名前が有りません。演劇や音楽劇を公演する時はさすがに演出家と舞台監督がいますが、合唱だけの公演では何故か私が音響だけでなく、演出と舞台監督を兼任します。理由は良く判っていません。稽古場には何度も東京から通いました。稽古場に行くと大まかな平面図を参考に立ち位置やピアノ

の位置マイクの場所等をバミります。その後客席側に陣取り皆さんの動きとか台詞の言いまわしをチェック。台本が未熟なところや足りない台詞を加筆訂正します。舞台装置の大まかな所を佐々波さんと相談しながら、皆さんが動きやすいように考えていきます。

佐久平PAから一時間も経たず、上田市文化センターに着きました。今日が劇場に入る前の最終稽古です。皆さんは仕事をしているので退社後の19時から稽古が始まります。肩を骨折していた方が久々に稽古に参加します。今日は全員揃って稽古が出来ると思っていたのですが、団員の一人と一緒に暮らす家族がコロナウイルス感染症と診断されたため、当人は発症していませんが用心の為欠席という知らせが入りました。1人欠席のまま最終稽古に突入です。久々に出て来た方の立ち位置等を調整して最終稽古は終了しました。

翌日はパンチカーペットを床に敷くためのテープの調達をしにホームセンター・ムサシに車で向かいました。実はその朝3時頃から急な腹痛で午前中に医者に行っていたの

ですが、頓服薬を飲みながら腹を抑えての買い出しです。その日はそれ以外の事が出来ずホテルで一日寝て翌日の仕込みに備えました。

2024年10月26日・27日500人定員の上田文化会館には大勢のお客さんが集まりました。

受付の方との開場の確認。楽屋での15分前コール、5分前のコール。そして開演のブザーを鳴らし、ようやく音響の仕事です。

大きな拍手の中で終演しました。合唱団の皆にも笑顔が広がります。

私にとっても緊張の中に楽しさが有る公演です。来年もまた上田に来ているのかな？

(東京演劇音響研究所)

電車に乗っていたら

東京都・坂口 野花



長かった夏の暑さからやっと解放され、この夏も無事に乗り越えた事を実感します。

こちらは20年ぶりに引越をしました。溜まりに溜まった物の多さに辟易しました。その中には今まで観た舞台のパンフレットや、MDデッキ、音源モジュールやサンプラー、いつ漬けたかわからない果実酒までありました。私の歴史を見ているようでしたが、そんな事は言っていられない、この際断捨離をしまおうと決意。ほぼ半分の荷物になり、身軽になった気分です。

先日、小田急線に乗っていた時の事です。その日は数日前の引越やら現場で疲れきっていた私は、座りたくて空いている優先席に座りました。電車が走り出してしばらくすると、近くに居た男の人が大声で「携帯なんか、優先席でいじっていて良いのか？ 若いもんがここに座っていいと思ってるのか？ ここのオバちゃん座らせてやれよ」と言って、ご高齢のご婦人を促します。すぐ近くの若い人を立たせ、私のすぐ隣の人にも「なぜ、立たないんだ？」と訊いています。隣の方は若い方でしたが、「足が悪いので」と言っています。次は私も立たされるのか？ と思っていたら、何故か声はかかりませんでした。ホッとしましたが、

大声は続きます。するとそこへ「大声やめましょう」とスーツ姿の方が声をかけます。勇気ある行動に心の中で、拍手しました。その方は京王電鉄の職員だそう。ここは小田急線だから、そこで声をかける義務はないけれど、職務からなのか？ その場はともすると誰かが緊急のボタンを押しかねない状況。そのうち、「俺は心臓が悪くてヘルプマークを付けているんだ」と怒鳴り始めました。私は反射的に「どうぞ、座って！」と言って席を立ちました。すると、「俺は座らない！」と言って怒鳴っていたのですが、京王電鉄の方と話しているうちに、次第に荒げていた声は収まっていきました。途中でその男性は乗り換えで降りたのですが、その時京王電鉄の方はその男性に対して丁寧にお辞儀をしていました。とても良い光景を見せて貰ったと思います。別路線の電車内で起きた事に無視する事もなく、声をかけた京王電鉄の方。ヘルプマークの男性のやり方は暴力的だけれど、間違った事は言っていない。優先席に座って譲らない、携帯いじる元気な若い人には正直、イラッとします。最近ハラスメントに

ついて問題になっているけれど、席を立たないのもある意味ハラスメントなのではないか？ もう少し周りの状況を見て、必要な方に座席を譲る事は必要だと感じました。

(東京演劇音響研究所)

大谷さん、ありがとう

東京都・鈴木 三枝子



2024年の日本で一番有名な「大谷さん」といえば、10月末にワールドシリーズで優勝を遂げた、ドジャースの大谷翔平選手、その人であると思われる。今回私が深く深く感謝を述べたいのも、この「大谷さん」だ。

畏るべき人だなあ、と常々思う。この人の有言実行ぶりは、「そんなこと起きる？」というくらいのミラクルで、ただただ啞然とするばかりだ。地区リーグでパドレスと戦っていて、あと一敗で敗退、という時、「あと2連勝すればいいだけ」と言って、本当に2連勝する(しかも個人競技

ではなくチーム競技で)。そんなこと、起きる？

そんな大谷さんに、私は田舎の片隅で本当にお世話になった。大谷さんに心からの感謝を捧げたい。そんなお話。

昨年末母を亡くして、父は一人暮らしになった。私たち3人姉妹は、各々東京で暮らしており、長姉は定期的に、次姉と私は、それぞれ帰れるときに帰れるだけ帰省している。これ自体は、介護が必要だった母の晩年と変わらない習慣なのだが。

変わったのは当然母の不在。それによって私が困りに困ったことがある。

昼過ぎに、ただいま、と言って帰省する。長年、造園業をしていた父は、昔からの職人さんの習慣で、引退した今も「御三時」を欠かさない。お茶ではなくコーヒーを淹れ、一息つく。

ここで毎回、「はて、何を話せばいいのやら。」なのである。

戦中生まれの父は、紛うことなき「昭和の父」である。割と気難しく、毎日欠かさず新聞を読み、テレビはほとんど

NHK。あまり軽口や噂話を好まない。小さい頃は、どこに父の地雷があるかわからなくて、びくびくしていたものだ。でも娘ばっかりの女家族で、父もちょっと肩身が狭かったかもしれない。現在に至っても、東京でお芝居の仕事なんかしている私とは、父の方だって「何を話せばいいのかわからない」のだろう。私が所帯を持っていて子供がいたりしたら、そんな話もできるだろうが、それもなし。致し方なし。

母の生前は、母の近況から、何とはなしに会話がスタートできた。エンジンさえ温まればいいのだ。曲がりなりにも50年くらい家族をやっていたのだから、最初さえスムーズに走り始められたら、後は何となく、だらだらと会話を続けられるのだ。しかし、そのエンジンに点火する火種の不在よ。

定期的に帰省する長姉とは違い、公演の千穂楽と次の稽古に入る合間で帰る私は、その間隔も不定期で、父との関係性もブツ切れになりがちである。帰らなくても電話でもして、気持ちを繋いでいけば

いいのかもしれないが、何の用事もなく父に電話するなんて！ とにかくそんなことをしてこなかったで、ものすごくハードルが高い。

そんな具合に家族の不思議を感じながら、それでもまあ積極的に帰省を続けていたある日、それは夏の気配を感じる頃だっただろうか。

毎朝、本当に毎朝、父NHK-BSを見ていることに気が付いた。そこには。

ドジャース、ドジャース、ドジャース！

エンジンの火種！

鮮やかかなり、大谷翔平！

私の困りごとは霧散した。とにかく大谷選手の活躍を追いかけていけばいいことに気づいたのだ。別に試合を見る必要はない。ネットニュースの見出しが、毎日その雄姿を教えてくれるではないか。

例えば。8/23第40号逆転サヨナラ満塁ホームランを打ったことを覚えておく。次に帰った時は、第一声、「お父さん、こないだの大谷の満塁ホームラン、生中継で見た？」「見てたよー、すごかったよ、興奮したよ。でもド

ジャースは投手が良くないんだよなーこれからどうなるかなー」云々閑雲。楽しそうな父である。

夏以降、会話の初手、いや父との会話のほとんどを大谷翔平で乗り切った。50-50の時は、一緒にテレビ観戦できたのもいい思い出だ。驚くほどに話題に事欠かない人なのだ。

そんなわけで、父との会話が弾むたび、私は大谷選手に感謝せずにいられないのだ。

大谷選手の2024シーズンはワールドシリーズ優勝というすごい結果で終わった。オフシーズンに入ってしまった。

でももう大丈夫。大谷選手の一件で、父はスポーツが全般好きなことに気づいたからだ。本人も84歳にしてシニアサッカーチームに所属しているほどの元気者なのである。「サッカーで走れなくなったら、次はゴルフをやる」と言っている。大相撲も毎場所観ているようだ。なので冬の間は、サッカーの天皇杯と、大相撲で会話を乗り切ろうと思う。

来年は大谷さんは2刀流を復活させるのだろうか。この間の肩のケガが早く治りますように。来年も再来年も、ずっ

と大谷選手のことを父と話せたら幸せだ。

私の好きな大学駅伝に父が興味を持ってくれたらいいのだけどなー。その気配はなし。致し方なし。

(Ivy Cricket)

2024年ミュージカルの旅公演 その3

神奈川県・千葉 治朗



皆さまおはようございます。劇団四季の千葉治朗です。

6月からスタートしたミュージカル『ジーザスクライストスーパースター』の全国公演もいよいよ11月17日の千秋楽が近づいてきて、カウントダウンに入りました。約半年間のツアーですが、旅に出る前は「半年かあ、長いなあ」とぼやきつつも、気がつくともう千秋楽か、あつという間だね」なんて言っています。ツアーでは舞台床にひくビニマの硬さで季節を感じます。夏場は柔らかく巻き

やすいですが、冬場は硬くなります。劇団四季は劇団なので、音響の僕でも舞台監督部のスタッフと一緒に、1秒でもはやくトラックに積み込むためにビニマを巻きます。

劇団四季の一般公演のツアーは大体半年かけて、日本全国を回ります。子供向けファミリーミュージカルのツアーは、小さな劇場でもやりますので、一年以上回ります。

僕はほぼ毎年、半年間はツアーに出っていますが、最近、日本全国で新しく建てられた劇場、建て替えや大規模改修した劇場が多くなってきていると感じます。新しい劇場は音響面では比較的残響時間が短くて、明瞭度が高く、ミュージカルに適しているところが多いように感じます。またClusterスピーカがパワフルなラインアレイで、そのまま見えた状態で吊ってあって、客席全体をカバーしている劇場が多いです。一方昔の劇場はプロセニウムスピーカスタイルで建築の壁の中に収まっていて、サランネットで隠され目立たないようにしてあります。四季のツアーは1日で搬入、仕込み調整、リハーサル、本番、解体、積み込み、のタイムテーブルなので、細

かい音響調整はできず、劇場の響きと劇場音響設備(特にCluster)で、ほぼその日の勝負(戦いか!?)が決まってしまう。古い劇場でさらに音響システムが改修されていないところは、プロセニアムスピーカが弱いので、ツアーでの調整は苦勞します。

日本全国の古い劇場は、ミュージカルを上演するのに音響的にはあまり良くない印象になってしまいましたが、決してそんなことはありません。逆に古い劇場の方が、音の分離がよく言葉が明晰で豊かな響きのところもたくさんあります。これは思い込み先入観かもしれませんが、新しい劇場はスッキリとした響きなのかもしれませんが、何か若い響きで、豊かさが足りないとか…、何か…、そんな気がします。そんな劇場もだんだん年数が経つにつれ、建物の部材が乾いてきていろんなところにホコリが溜まって、ちょうどいい塩梅の響きになっていくのでしょうか。逆に古い劇場でも音響システムを新しいものに改修しているところもあり、もちろん良い音になっています。ミュージカルの本場、ブロードウェイやウエストエンドの

劇場は古い劇場が多く、そこに最新の音響システムを仮設で仕込んでやっていますね。

もういい歳なので、ツアーは体力的にもしんどい仕事ですが、最近自分にはこのツアーというものが、天職なのかもしれないと思えてきました。やはり毎日違う環境、限られた条件の中でどのように音を調整するか、毎日頭を使いますし、それが楽しく思えてきました。ステイのロングラン公演の仕事もやりますが、マンネリ化で思考停止に陥りがちです。そうならないように自分でモチベーションを持ち上げていかななくてはなりません。

今日もどこかの劇場で音を作っています。その時はよろしく願いいたします。

(劇団四季音響部)

またまた引き継ぎ

神奈川県・千葉 真理子



皆様おはようございます。劇団四季の千葉真理子です。

夏は恐ろしい猛暑が続き、秋になっても暑い日が続く、ふと気づくと涼しくなっていました。秋という季節が短くなっているのではないのでしょうか。そして寒い冬がやってきます。あーまたひとつ年とっちゃうなあ。(独り言)

劇団四季はご存知のとおりロングラン公演が多く、一度その演目の担当になると、ずっと同じ演目をやっているイメージ(イメージではなく、実際にそう)でした。私も7年間(途中で別演目を挟んだりもしましたが)やり続けました。そしてなんと、同僚で20年ぐらいやっている人もいました。ひゃー、オギャーと生まれた赤ちゃんが、私は小学校入学ですが、その人の場合は、成人式を迎えちゃうのです。演目の主、凄いですね。(よっ、大御所!)

しかし、最近と同じカンパニーの中でオペレーターを交代したり、また何かあった時のバックアップオペレーターが出来るようオペレーターを増やしたり、色々と体制が変わってきました。精神的にもその方がいいです、長い間同じ事をやるには体力、忍耐力、強い精神力が必要です。そう、頭が煮詰まってしまうとか

らね。

私の最近の仕事が、そのバックアップ体制絡みで、ずっと本番引き継ぎが続いているのです。これが大変で頭が混乱しちゃうんですね、これが。煮詰まるのも嫌ですが、混乱するのも考えものです。

この前の演目はデータチェンジのたたきが多く、バランス取るどころではなかったのが苦労した点です。今回は「かぶり」の問題で四苦八苦しています。

「かぶり」とは、もう皆さまに説明するまでもなく、ある人のマイクに別の人の声が入ってくる現象です。オーケストラの楽器も被り込み問題があると思いますが、私の場合はワイヤレスマイクのかぶりです。ミュージカルですから、向き合ったデュエット曲がよくあり、そういう歌ほど声を張り上げてきます。何とか一人のマイクで対応したり、音量を落としたりフェーダー操作で乗り切ります。役者さんにも顔の向きを調整してもらったりします。でも本当に大変なのは、お芝居のセリフのシーンなのです。次から次へと喋りまくるし、人数も多いし、もう！みんな近づかないで！！失敗して、超モ

コモコ音になったり、爆音になったり、ハウリングを起こしたり、あーごめんなさい！！という感じです。それをサラッと、何事もなかったかのように、スマートなフェーダーさばきをしたいものです。

基本、バックアップ体制の引き継ぎは、現在のオペレーターの完全コピーが理想です。そうしないと一早い交代ができないからです。

長年培ってきたオペレートの技術(クセ)は、そうそう変えることが出来ません。皆さんもそうかと思いますが、つい出ちゃうのです。だからとっても苦労します。その点最初からやっている演目は自分の好きな様に作り、オペレートすることができるので、開幕までは大変ですが、ランニングになってしまえば、結構細部に渡って、腑に落ちているのでどんなに複雑でも大丈夫なものです。オリジナル様(開幕担当オペレーター)は素敵です。

以前は作品のことだけを考えていれば良かったのですが、この状況は「同じ事を＝真似を」するというのも実行しつつオペレートすることが不可欠です。そうすると、ついつい硬いぎこちないオペ

レートになっているのかもしれませんが。また不安も出ちゃいます。指の動きは心の動き、音にも反映されてしまいます。本当にやりやすいのが一番です。

今回は引き継ぎを始めたばかりで、まずカンパニーの雰囲気慣れないと。さらに半年ぐらいはやりそうなので、前回よりはじっくり自分のものに出来そうです。引き継ぎ時間は同じくらいなのですが。

春夏秋冬、季節の中で秋が一番好きです。清々しい空気や、晴れわたる青空。そんな日は音も清々しく上手くいきます。そんな気がします、気持ちの問題ですかね。

ではまた、ご自愛を。

(劇団四季音響部)

▼△▼△▼△▼

『東西とーざい』は、オープンな投稿コーナーです。

仕事のことから、心の声まで、なんでも構いませんので、文章にして下記までお送り下さい。

締切りは、偶数月末です。

お送りいただいた方には、原稿料をお支払いしています。《協会誌編集部

pub.ssaj@nifty.com》